

資料編

●用語解説

【ア行】

○亜高山帯

山地にみられる植物の垂直分布帯のうち、山地帯と高山帯との間の部分。常緑針葉樹林帯に代表されます。本州では標高1,700から2,500mの間にみられます。(年平均気温がほぼ6.0～11.5℃の間)。

○亜高山帯針葉樹林（常緑針葉樹林）

亜高山帯の代表的な植生。西日本では、紀伊半島と四国の最高峰の頂上付近のみで、愛媛県石鎚山(1,982m)が南限。本州と四国ではシラビソ、オオシラビソ、トウヒ、コメツガ、クロベなどで構成されます。これらの高木が樹冠を占め、林床は暗い。針葉樹の落葉は樹脂が多く、気温も低いいため土壌動物に分解されにくく、未分解の粗腐植が厚く堆積し、分解されると土壌は酸性化するため、林床には、コケ類、地衣類、シダ類など酸性の土壌に適した植物が生育しています。

○アドプションプログラム（養子化・里親制度）

特定の自然保護区や生息地、森林の一部、小川で地域の生物種を養子に迎えるプログラムで、参加者の間に責任感を芽生えさせるので有効とされています。例えば、対象地区の清掃、地域の種による植栽、特定の地区の復元、より広い公共圏を対象とした「市民活動の日」の設定などがあります。

【イ】

○維管束植物

維管束と呼ばれる水分や養分を通すための組織を持つ植物の総称。根から水分を採り、茎で植物体を支持し、葉で養分を合成するという生活形と密接な関係を持って発達してきた形態。シダ植物および種子植物（裸子植物・被子植物）をいい、藻類、コケ類などと区別されます。

維管束植物と非維管束植物（維管束植物以外）という区分は、環境省および都道府県や市町村で作成されている植物版のレッドデータブックやレッドリストにおいて、複数の分類群をまとめる場合によく用いられています。

○いきもの認証マーク

生物多様性を重視した持続可能な農林水産品や特産品などを認証する制度。普及のためには、農薬の使用削減や用水路に魚道を整備するなど、生態系を復活させるための取り組み。さらにその結果、どのような生きものが増えたかを調べるための手引も作り、コウノトリ以外にもメダカなど消費者に分かりやすい認証マークを考案することなどが必要です。

マークを付ける農作物を選ぶ方法は（１）自治体などが設置した第三者機関が無農薬で栽培したかどうかなどの基準を作成して認証することや、（２）地域の生産者団体が自主的に基準をつくり認証することがあります。

○遺伝子資源

人間にとっての遺伝子の潜在的な有用性に着目して使われる言葉。

さまざまな生きものの遺伝子は、独自の機能を持つものが多く、人間に有用となるものも含まれています。

長い進化過程の末に残されてきた生きものの遺伝子は、それ自体が貴重で、保護を図るべきと考えられています。

栽培植物の原種保護、家畜などの系統保護をはじめ、野生生物の地域個体群保護などは、遺伝子資源保護の観点からも重要な課題です。

【ウ】

○海のエコラベル（MSCラベル）

国際的な非営利団体（NPO）である海洋管理協議会（Marine Stewardship Council, MSC）の環境規格に適合した漁業で獲られた水産物に認められるラベル。

資源と生態系の保護に積極的に取り組んでいる漁業を認証し、資源と海に優しい持続的な漁業を促進するために、持続的な漁業で獲られた水産物にラベルを貼って、消費者に持続的な漁業をアピールしています。日本では（社）大日本水産会事業部が事務局となり、外部審査機関によって審査・認証されています。

【エ】

○栄養塩

炭素、水素、酸素以外の無機塩類として、植物の栄養に必要な、リン、窒素、カリウム、ケイ素などの主要元素とマンガン等の微量元素のこと。

○エコツーリズム

自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化に責任を持つ観光のあり方です。

1980年代後半、地球環境の保全意識の高まりとともに、環境保全について学ぶことも観光の重要な目的であるとの認識ができてきたことや、大衆による観光活動（マスツーリズム）が自然環境を悪化させるひとつの要因とみなされることなどを背景として登場しました。

○エコファーマー

「持続農業法」・「奈良県持続農業導入指針」（平成23年7月22日改訂）に基づいて、環境にやさしい農業に取り組む計画（①土づくりの技術、②化学肥料を減らすための技術、③化学合成農薬を減らすための技術）を立て、県の認定を受けた農業者のこと。目標は、化学肥料・化学合成農薬を3割以上低減となっています。

○エコミュージアム

「行政と地域住民が一体となって地域の自然環境と生活文化をそのまま野外展示物として保存育成し探求すること」で、地域全体を博物館に見立てて保全し、活用する活動が各地で展開されています。

環境省のエコミュージアム整備事業は、国立・国定公園内において自然体験、自然学習のための中核施設として地域の自然を総合的に観察体験できるフィールドと利用情報の提供や解説活動などの拠点となるビジターセンター（エコミュージアムセンター）を一体的に整備するものです。

奈良県には、洞川エコミュージアムセンターがあり、さまざまな動植物が生息するフィールド。周辺で知られる数多くの洞窟や名水。そして自然崇拝から生まれた修験道の拠点として栄えた歴史・文化。近畿屈指の豊かな自然に恵まれた吉野熊野国立公園を背景に、見て、ふれて、親しめる体験型のミュージアムとなっています。

○エコロード

調査、計画段階から設計、施工、管理の段階まで、自然環境の保全にきめ細かく配慮された道路のこと。自然環境の改変を最小限とするような路線の選定を行うとともに、動物の生息地を分断しないように橋梁やトンネルを採用したり、動物用の横断構造物を設置して動物の移動を助けるなど、さまざまな工夫がされています。また、建設により損壊する自然環境を復元するなどの措置をとります。

○エコロジカル・フットプリント

日本は、食料の約6割・木材の約8割など多くの食料・資材・原料を海外に依存しています。

このことは、世界中の生きものの恵みに支えられてはじめて私たちが生活していることを示しています。輸入元の海外での食料・資材・原料の生産の基礎となる生物多様性の保全に対しても責任があります。

実際に、私たちの生活がどれだけ自然環境に負荷をあたえているかを教えてくれるものとして、エコロジカル・フットプリントという指標が考えられています。

エコロジカル・フットプリントとは、人間活動が与える負荷に対する地球の環境の容量を表す指数。生活を維持するのに必要な一人あたりの陸地および水域の面積で表します。

日本のエコロジカル・フットプリントは、4.3ha/人で、世界平均は1.8ha/人。世界の人々が日本人のような生活をする、地球が約2.4個（4.3÷1.8）必要だといわれています。（出典：NPO 法人エコロジカルフットプリントジャパン）

【オ】

○落ち葉かき

かつては堆肥をつくるため行っていた。栄養物質の除去による富栄養化の防止の意義があり、富栄養化で成長の速い少数の種の優占が促されます。これは妨げる落葉落枝の除去は、落葉広葉樹二次林の林床における植物の種の多様性を保つために重要です。また、落ち葉かきによりキノコ類の発生が促される効果があり、代表例としてはアカマツ林のマツタケなどがあります。

○温室効果ガス（G H G：Greenhouse Gas）

大気中に放出された二酸化炭素やメタンなどのガスは太陽からの熱を地球に封じ込め、地表を暖める働き（温室効果）があり、これらのガスを温室効果ガスといいます。

温室効果ガスにより地球の平均気温は約15℃に保たれていますが、仮にこのガスがないと-18℃になってしまいます。しかし、産業革命以降、温室効果ガスの大気中の濃度が人間活動により上昇し、「温室効果」が加速されています。

1997年の第三回気候変動枠組条約締約国会議（COP3）で採択された京都議定書では、二酸化炭素（C O₂）、メタン（C H₄）、一酸化二窒素（N₂O）、ハイドロフルオロカーボン、パーフルオロカーボン、六フッ化硫黄の6物質が温室効果ガスとして削減対象となっています。

○温室効果ガスの種類と特徴

温室効果ガス	地球温暖化係数（注）	用途・排出源
二酸化炭素（CO ₂ ）	1	化石燃料の燃焼など
メタン（CH ₄ ）	25	稲作、家畜の腸内発酵、廃棄物の埋め立てなど
一酸化二窒素（N ₂ O）	298	燃料の燃焼、工業プロセスなど
ハイドロフルオロカーボン類（HFCs）	92 ～ 14,800	スプレー、エアコンや冷蔵庫などの冷媒、化学物質の製造プロセス、建物の断熱材など
パーフルオロカーボン類（PFCs）	7,390 ～ 12,200	半導体の製造プロセスなど
六ふっ化硫黄（SF ₆ ）	22,800	電気の絶縁体など。

（注）気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第4次評価報告書の値（100年間での計算）のうち、地球温暖化対策の推進に関する法律で定義されているもの

出所：地球温暖化係数は、気象庁「IPCC 第4次評価報告書第1作業部会報告書 技術要約」

用途・排出源は、全国地球温暖化防止活動推進センターウェブサイト「温室効果ガスの特徴」